三ヶ国の体育学研究の傾向分析

(昭和 年 月 日受付)

吉 沢 宗 吉 吉 田 茂*

An Analysis of the Tendency of physical Education Research among Three Countries

S. YOSHIZAWA and S. YOSHIDA (Saitama University)

Along with the rapid advancement in natural sciences, physical education research in Japan is increasing both in quality and quantity. Physical Education is, in its real character, a unique learning that includes many aspects such as natural science, humanity, social science and art. So we believe it to be necessary, not only to grasp the present situation, but also to pursue the idea in the future, to know how these four areas of study are regarded as important and how they are studied.

We have attempted here to analyze the tendencies in Japan, East Germany and America through the comparison of academic publications in our special field.

The results attained within our limited materials are as follows:

1) In the area of HISTORY AND PHILOSOPHY (HUMANITY), the aim of which seems to pursue values and objectives, America shows least interest among the three countries. And this tendency is getting conspicuous year after year.

2) Each country has been researching PHYSICAL EDUCATION SCIENCES at considerably high level. The rate of this area to all research articles was over 25% in Japan. This was the highest percentage compared with other countries.

3) In America the rate of TEST AND MEASUREMENT to all research articles was more than 40%; this percentage is getting to go higher.

Above-mentioned tendency seems to come from a great influential effect of the rapid advancement in natural sciences in 20th century.

We do not think this is a favorable tendency. at all Therefore, we came to believe firmly that we ought to research in HUMANITY more than in other areas.

概 要

自然科学の急速な発達と呼応して、日本における体育の研究も質量ともに変化している。

体育はその本性上、自然科学、人文科学、社会科学、芸能の局面を包含している独特な学問領域である。

体育の研究において、これら四つの領域がどのように重要視されているかを知ることが、現状を理解するだけでなく、将来の理念を追求するためにも大切なことであると考えられる。

吾々は、日本と東独、およびアメリカにおけるこの種の傾向を、それぞれの国の体育の学術的動向

行物を比較することによって分析しようと企てた。

吾々の限られた資料によつて得られた結果は次のとおりである：

1) 歴史・哲学（人文）は価値や目的追求を意図する領域と思われるが、この領域に対する関心は諸國中アメリカが最低でありその傾向は年とともに顕著になつている。

2) 各国とも体育の科学の研究はかなり高度に行われているが、全体に占めるこの領域の割合は日本が25%を越えて諸國中最高である。

3) テストと測定 の全体に占める割合はアメリカは40%を越え、その傾向は高まりつつある。

以上の傾向は 今世紀における自然科学の急激な

* 埼玉大学

る発達に影響された結果で、必ずしも望ましい傾向ではなく、吾々は、他の領域よりも一暫人文系の研究に努力すべきであると信ずる。

1. 研究の方法

各国で発行されている体育研究雑誌の中で特殊な領域のみを専門的に取扱っている雑誌はたくさんあるが、それらのものは除いて、各種領域を包括していると思われる下記資料を分析の対象とした。

1) リサーチ・クォーターリ(Research Quarterly)(1930～1960)の発表題目の一覧表

2) 身体文化の理論と実際(Theorie und Praxis der Körperkultur)(1966年一月号より12月号まで)

3) 体育(Körper Erziehung)(1966年一月号より12月号まで)

4) 体育学研究 第十一巻第五号(日本体育学会第17回大会記録)

研究発表題目を分類する方法は各刊行物とも、それぞれ独自の方法を採用しているが、比較を便ならしめるために、リサーチクォーターリの分類方法に合せるために、その他のものは編成がえを行った。

アメリカのリサーチクォーターリは1930～1960までの31年間に亘っているため、各領域の占める比重を見得ることは勿論であるが、この期間の盛衰などの傾向をうかがうことも可能である。そのために素朴な方法ではあるが傾向指数を以下のような方法で算出した。

a, b, c, をそれぞれ(1930～1939)(1940～1949)(1950～1960)のそれぞれ10ヶ年間(cは11ヶ年間)における研究発表の演題数とすると、

$$\text{傾向指数} = (2c+b)/(2a+b)$$

従って、この傾向指数が1.00の場合には、31年間に亘って題目数の増減がなく横ばい状態であることを示し、1.00以上は上昇傾向1.00以下は下降

傾向のそれぞれの度合いを示すこととなる。従って、2.00は演題数が2倍に増えたことを、0.50は半分に減じたことを示す。三つの期間の中、a, bはそれぞれ10ヶ年でありcだけは11ヶ年であつて厳密に言えば数値的に矛盾があるが補正は行わなかつた。

日本およびドイツの発表題目をアメリカ式の分類法に編成替えする場合に論文や、その抄録の内容を読んで、その帰属を決定するように努めたが、それでも研究者である吾々の主観的な判定に偏ることを免れない部分もあつたと思われる。

それぞれの領域に数えられている研究題目数は、同一の演題が、二つ以上の領域にまたがって数えられている場合が多い。即ち、“高校陸上20傑(男子)の社会学的研究”という題目は、陸上競技の研究としても数えられ、社会学的研究としても数えられているということである。従って、各領域に包含される頻数の総和は、実際の研究発表の演題数よりも多くなっている。

各研究領域の%は全体の延頻数(一つの演題が二つ以上に数えられているので、この用語が適当と思われる)に対する、この研究領域の延頻数との割合を示している。従って研究領域の%は、体育全体の関心の総和に対するその領域の関心の度合いを反映していると考えられると思う。

ドイツの雑誌は、それぞれ月刊雑誌12冊であり、その論文題目の数が少い。日本の場合は演題数は多いが只一回の研究発表会の記録である。アメリカのは31年間に亘る記録である。このように比較対象となる資料の間に量的にも質的にも相異があるが、これを補正する補当なる手段もないので、そのままの素朴な方法で分析を行った。

2. 分析の結果

a, 各国の研究で歴史、哲学的研究の、研究全体に占める%

表 1

刊行物の名称	年 度	全研究延頻数	歴史哲学の頻数	同 上 %
リサーチクォーターリ(アメリカ)	1930～1960 31年間	7244	87	1.2
"	1950～1960 10年間	2355	13	0.5
身体文化の理論と実際(ドイツ)	1966(1月～12月)	175	25	14.3
体育(ドイツ)	1966(1月～12月)	137	12	8.7
体育学研究(日本)	1966(学会発表)	785	68	8.7

b, サリーチコータリー31年間の研究頻数の分類とその傾向指数

表 2

発 表 内 容	頻 数				傾向指数
	合 計	1930～1939	1940～1949	1950～1960	
運動競技と体育との関係	98(1.36)	33	23	32(1.27)	0.88
各種スポーツの研究	735(10.17)	216	149	370(14.61)	1.52
水泳およびダイビング	125	35	35	55	1.35
陸上競技	86	40	16	27	0.70
バスケットボール	75	26	17	32	1.21
ベースボール	63	9	4	50	4.72
アメリカンフットボール	52	19	12	21	1.08
レスリング	43	4	14	25	2.90
体 操	40	20	3	17	0.86
ウェイトトレーニング	35	0	8	27	7.75
硬式庭球	32	8	7	17	1.78
バレーボール	30	4	3	23	4.36
ボーリング	24	1	1	22	15.00
ボクシング	19	5	6	8	1.37
ゴルフ	16	7	3	6	0.88
バトミントン	14	0	6	8	4.66
洋 弓	12	9	1	2	0.26
フィールドホッケー	11	5	2	4	0.83
スキー	10	2	0	8	4.00
フェンシング	9	1	2	6	3.50
サッカー	7	6	0	1	0.16
ソフトボール	6	0	0	6	—
乗馬 (Horsemanship)	6	1	5	0	0.71
ハンドボール	5	1	2	2	2.00
アイスホッケー	3	1	0	2	2.00
水 球	3	3	0	0	—
卓球 (Table Tennis)	2	0	1	1	2.00
スピードボール	2	1	1	0	0.33
タッチフットボール	2	2	0	0	—
シューティング (Shooting)	1	1	0	0	—
スカッシュ (Squash)	1	1	0	0	—
ビリヤード (Billiards)	1	1	0	0	—
ダンス (リズムを含む)	80(1.17)	59	8	13(0.52)	0.27
ダンス	38	31	3	4	0.14
リズム	42	28	5	9	0.37
健 康	290(4.01)	102	87	101(3.99)	1.00
公衆衛生	41	8	19	14	1.35
評 価	90	28	18	44	1.44
健康教育	60	23	11	29	0.86
健康的な学校生活	37	25	8	4	0.27

() 内は全体に占めるその領域の%

発 表 内 容	類 数				傾向指数
	合 計	1951~1959	1960~1969	1970~1979	
組織の管理	32	5	21	9	1.19
学校健康奉仕	25	13	10	2	0.39
歴史および哲学	87(1.20)	38	36	13(0.51)	0.55
歴 史	66	23	29	9	0.55
健康教育	4	0	3	1	1.66
身体活動	23	9	9	5	0.70
体 育	35	18	15	2	0.37
レクリエーション	4	1	2	1	1.00
哲 学	21	10	7	4	0.56
組織と管理	1247(17.26)	708	336	203(8.01)	0.42
事故と安全	57	26	14	17	0.73
意図と目的	30	25	5	0	0.09
施設用具	18	12	4	2	0.28
運動競技と体育	66	43	10	13	0.37
参考書目 (Bibliography)	64	36	16	12	0.45
予算及び財政	5	3	1	1	0.43
評 価	202	119	57	26	0.37
設 備 (Facility)	36	23	10	3	0.28
一 般 (General)	11	11	0	0	—
対外競技校内競技	46	35	8	3	0.13
指導法	83	40	19	24	0.47
職員 (コーチ, 講師, 教師)	115	45	36	34	0.82
政策と方法 (人種問題, 制度)	166	118	40	8	0.20
教員養成 (単位, カリキュラム)	131	60	48	23	0.55
指導計画 (Program)	186	94	60	32	0.50
監督 (Supervision)	31	18	8	5	0.40
体育の科学	1161(16.06)	431	324	424(16.74)	1.02
体育への適応	169(2.34)	101	35	33	0.42
身体力学 (Body mechanics)	94	69	16	9	0.22
矯正練習	28	17	5	6	0.43
身体虚弱者 (Handicapped)	40	15	9	16	1.08
組織と管理	7	0	5	2	1.80
練習の解剖学・生理学	992(13.73)	312	289	391	1.17
用具の研究	40	4	6	30	4.71
筋肉作業の化学	30	12	5	13	1.01
循環系	247	73	77	97	1.22
条件づけと練習	135	39	49	47	1.12
環境の影響	37	12	16	9	0.85
内分泌系	13	5	2	6	1.16
持久性	15	3	8	4	1.14
刺激剤 (Ergogenic aid)	26	2	8	16	3.33
疲 労	40	9	12	19	1.66

() 内全体に対する%

発 表 内 容	題 数				傾 向 指 数
	合 計	1930~1939	1940~1949	1950~1960	
筋肉系	39	11	9	19	1.51
神経系	17	11	3	3	0.36
栄 養	82	23	26	33	1.27
呼吸系	128	57	34	37	0.73
骨格系	19	14	4	1	0.19
力 (Strength)	52	14	14	24	1.48
ウォームアップ	27	0	0	27	—
一般 (General)	45	23	16	6	0.45
キネシオロジー	92(1.27)	26	25	41	1.36
解剖の原理	22	9	10	3	0.57
動きの原理	33	9	9	15	1.44
身体の原理	37	8	6	23	2.17
心理学 (一般)	237(3.27)	34	50	153(6.05)	3.02
レクリエーション	128(1.77)	63	45	20(0.80)	0.50
評 価	30	11	13	6	0.71
組織と管理	24	9	11	4	0.65
レクリエーションの研究	74	43	21	10	0.47
社会学 (一般)	119(1.64)	52	40	27(1.06)	0.65
テストと測定	2949(40.82)	903	912	1134(44.77)	1.16
到達と演技の能力	263	87	96	80	0.94
人体測定	356	118	126	112	0.96
測定用具の研究	42	15	4	23	1.47
平衡 (Balance)	32	3	15	14	2.04
身体力学	51	46	4	1	0.06
循環機能テスト	17	3	13	1	0.79
級別指数	190	64	71	55	0.91
整合力 (Coordination)	26	7	11	8	1.08
持久力	56	9	22	25	1.80
柔軟性	33	2	3	28	4.40
筋肉運動知覚 (Kinethesis)	31	1	4	26	9.33
知識テスト	85	40	9	36	0.91
学習 (Learning)	122	22	20	80	2.81
テストの方法 (Method of Testing)	380	131	95	154	2.31
運動性テスト (Motor Test)	181	69	105	7	0.49
運動適性 (Motor Fitness)	227	38	50	139	2.60
身体適性 (Physical Fitness)	225	37	104	84	1.52
心理学的テスト	166	79	41	46	0.66
反応時間テスト	71	18	5	48	2.45
技術テスト (Skill Test)	76	30	14	32	1.05
速力 (Speed and velocity)	106	25	17	64	2.16
統 計	179	58	72	49	0.90
視聴覚テスト	34	1	11	22	4.07
総 計 (Σ)	7224	2650	2041	2533	0.97

c, 日本体育学会の体育学研究の分析（体育学研究第11巻第5号）

表 3 全体に対する各領域の比重（％）

領 域	延 頻 数	頻数合計に対する％
各種スポーツの研究	165	21.01
ダ ス	40	5.09
健 康	22	2.80
歴 史 お よ び 哲 学	68	8.66
組 織 と 管 理	74	9.42
体 育 の 科 学	192	24.45
心 理 学	38	4.84
リ ク リ エ ー シ ョ ン	18	2.34
社 会 学	78	9.93
テ ス ト と 測 定	90	11.46
合 計	785	100.00

3 結果の考察

いかに権威ある刊行物といえども、それだけを通覧して一国の体育学の研究傾向を結論づけるといことは危険である。その結論を価値あらしめるためには多種多様な資料を総合的に然も有機的に活用する必要がある。そのような意味で、本研究題目はいかにも潜越である。然しながらこの資料の乏しいささやかな研究が、将来のこの種の研究の動機ともなることを望みながら、体育学研究の在るべき姿を求めようとする吾々にとつて示唆に富むいくつかの点を与えられたように思う。それは次の諸点である。

a. 研究の内容は自然科学系統のものが豊富であつて、人文、社会、芸能等の他の領域が少いこと。

各領域の内訳

表 4—1 各種スポーツの研究の内訳

種 目	陸	体	バ	ハ	ス	剣	サ	水	柔	バ	野	重	ラ	レ	フ	テ	登	蹴	グ	卓	弓	ボ	ス	洋	合 計
	上	操	レ	ンド ボ ール	キ ー	道	ッ カ	泳	道	ッ ケ ット	球	拳	ビ ー	ス リ ン グ	ン シ ン グ	ニ ス	山	鞠	ライ ダ ー	球	道	ー ト	ケ ー ト	弓	
頻数	31	25	16	12	12	11	8	8	7	7	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	165

表 4—2 健康の内訳

項 目	評 価	組 織 と 管 理	健 康 生 活	健 康 教 育	公 衆 衛 生	健 康 サ ー ビ ス	寿 命	合 計
頻 数	5	5	4	3	2	2	1	22

表 4—3 歴史および哲学の内訳

項 目	歴 史	哲 学	合 計
	体 身 体 活 動	道 徳 学 洋 洋 道	
	レ ク リ エ ー シ ョ ン	健 康 教 育	
頻数	12 11 8 1	33 1 1 1	68

表 4—4 組織と管理の内訳

項 目	指 導 法	指 導 計 画	事 故 と 安 全	評 価	政 策 と 方 法	監 督	器 具 と 用 具	対 校 外 内 競 技	施 設	教 員 養 成	意 図 と 目 的	競 技 と 体 育	参 考 書 目	予 算 と 財 政	一 般	合 計
頻数	15	14	9	6	6	6	4	4	3	2	1	1	1	1	1	74

表 4-5 体育の科学の内訳

体育への適応					体育の解剖学生理学												キネシオロジー		心理学	合 計		
項 目	虚 弱 者	身 体 力 学	組 織 と 管 理	矯 正 練 習	環 境 の 影 響	筋 肉 系	循 環 系	疲 勞 系	神 經 系	一 般 系	呼 吸 系	筋 肉 の 化 学	持 久 性	栄 養	骨 格	刺 戟 剤	内 分 泌	動 きの 原 理	身 体 の 原 理		解 剖 の 原 理	心 理 学
頻数	17	16	1	0	27	18	14	14	13	13	9	4	3	3	2	1	1	24	7	5	38	230

表 4-6 レクリエーションの内訳

項 目	方法 の 研 究	組 織 と 管 理	評 価	合 計
頻 数	9	8	1	18

表 4-7 社会学の内訳

項 目	運 動 部	地 域・ 職 域	国 際 競 技	社 会 体 育	合 計
頻数	30	23	14	11	68

表 4-8 テストと測定の内訳

項 目	テ ス ト の 方 法	運 動 適 性	反 応 時 間	統 計	視 聴 覚	コ ー ジ ネ ー シ ョ ン	持 久 力	平 衡 力	技 術 テ ス ト	知 識 テ ス ト	身 体 適 性	学 習	筋 肉 運 動 知 覚	柔 軟 性	速 力	演 技 能 力	級 別 指 数	運 動 性 テ ス ト	合 計
頻数	17	12	11	11	6	6	5	5	3	3	3	2	1	1	1	1	1	1	90

d, ドイツの体育学研究の分析（東ドイツ刊行
“体育の理論と実際” 1966年1月号より12月号まで）

表 5 全体に対する各領域の比重 (%)

領 域	延 頻 数	頻数合計に対する%
各種スポーツの研究	41	23.43
ダ ン ス	0	0
健 康	2	1.14
歴 史 お よ び 哲 学	25	14.29
組 織 と 管 理	34	19.43
体 育 の 科 学	29	16.57
心 理 学	4	2.29
レ ク リ エ ー シ ョ ン	5	2.86
社 会 学	15	8.57
テ ス ト と 測 定	20	11.42
合 計	175	100.00

各領域の内訳

表 6-1 各種スポーツの研究の内訳

項 目	陸 上	ス キ ー ン グ	ト レ ー ニ ン グ	体 操	バ ス ケ ッ ト	水 泳	ゲ ム	サ カ キ	柔 道	バ ド ミ ン トン	ボ ウ ス ン グ	登 山	自 転 車	合 計
頻数	9	6	5	4	4	4	3	1	1	1	1	1	1	41

表 6-2 健康、歴史と哲学、組織と管理の内訳

項 目	健康		歴史と哲学		組 織 と 管 理					器具と用具
	健 康 生 活	歴 史	哲 学	参 考 書 目	指 導 法	指 導 計 画	意 図 と 目 的	対 外 競 技	運 動 競 技 と 体 育	
頻数	2	17	8	20	3	3	3	2	2	1

表 6—3 体育の科学の内訳

		体育の 適応		練習の解剖学, 生理学				キネシオ ロジー		心理 学	合 計	
項 目	組織と管 理	矯正練 習	神 経 系	筋 肉 系	循 環 系	呼 吸 系	一 般	動 きの 原 理	研 究 法	身 体 の 原 理	心 理 学	
頻数	3	1	3	2	1	1	1	8	3	2	4	29

表6—4 レクリエーション, 社会学, テストと
測定の内訳

項 目	レクリ エー ション		社 会 学			テストと測定						合 計
	レ ク リ エ ー シ ョ ン	研 究 と 管 理	社 会 体 育	地 域 組 織	国 際 競 技	テ ス ト の 方 法	筋 力	柔 軟 性	コ ー ヂ ン グ	身 体 適 性	反 応 時 間	
頻数	3	2	7	6	2	15	1	1	1	1	1	40

一般的に言つてこの現象は三国に共通に見られるように思われるが、その内容は必ずしも一樣ではなく、体育の科学的研究の領域では量的に見て日本が三国中最高で全体の24.45%。(表3)アメリカとドイツとは共に16%強である。(表2, 表5)これは日本の学会の主脳部の人達の傾向をも反映していると思われる。

b. 体育の目的観や価値観を分担する歴史ならびに哲学など人文系の領域の研究が全般に低調であるように思われる(表1)。特にその傾向はアメリカにおいて顕著である。これはa項と相対的な関係にあつて、自然科学の膨張が他の領域を圧迫しそれが歴史哲学の領域に最も強く皺寄せされているように思われる。

c. 研究が業績のための手段化されているという傾向があるように思われる。研究発表が業績を評価する有力な手段となつている現代において、それはある程度止むを得ないことであるが、その比重があまりにも高くなることは問題であるように思う。こうした傾向は当然の結果として、時間や労力を必要としない手軽に行える研究が観迎され

ることになろう。この傾向の最も顕著なものもアメリカであつてテストおよび測定の研究が全体の40%を凌駕しその傾向は増勢を辿っている。アメリカの学界の自然淘汰や適者生存は厳しいものがあり、その研究は義務づけられてもおり、昇給や栄転がかかつている。そのようなことが、手軽に行えて効果のあがる研究へと走らせることになるのであろう。

d. 各研究領域間の比重には調和が必要であると思われる。各領域間の望ましい比重を割り出すということは、勿論困難なことであるが、さればといつてその調和を考える必要がないとは思えない。自然科学の急激なる発達をもつて特徴づけられている現代なればこそ、一層これに対する批判も必要であり、自然科学以外の他の領域を推進させるための方向づけとこれに対する労力が必要であると思われる。

e. 比較された刊行物のうち、日本およびドイツのものは、1966年のものであり、アメリカのものは最も新しいもので1960年のものであつて、その間に若干の時期的なずれがある。特にリサーチコーナーの最近の傾向は執筆してから発表してもらえるまでに2年間ぐらい止め置かれることは珍らしくないことを考えれば、猶更である。いつれ機会を見て時期的にも一致した方法で比較することができれば思っている。

参 考 文 献

- 1) Pearson, G.B and Whalin, J.K "Reference Index of the RESEARCH QUARTRLY, Health Physical Education Recreation 1930 to 1960, All American Production and Publishers, San Diego California (1964)
- 2) Theorie und Praxis der Körperkultur; Heft 1~12 1966 Sportverlag 108 Berlin Neustatische Kirch Strasse 15
- 3) Körper erziehung: Heft 1~12 (1966) Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin
- 4) 体育学研究: 第11巻 第5号 (日本体育学会第17回大会記録) 日本体育学会 1967年7月発行